

（京極家と若狭小浜藩）

京極家と小浜藩

概要

17 世紀初頭に、徳川幕府が大名という領主によって藩を治める体制を確立すると、若狭国は小浜藩として 1600 年に京極高次（^{きょうごくたかつぐ}1563 年～1609 年）に割り当てられました。この新しい藩の最初の統治者として、高次はすぐに小浜城の建設や、町と港周辺のさまざまな改良工事を始めましたが、小浜の変化が完了する前に、1609 年に亡くなりました。彼の息子の忠高（^{ただか}1593 年～1637 年）は 1634 年に松江藩に移されるまで、小浜藩を統治しその工事を続けました。

もっと詳しく知る

京極高次

応仁の乱（1467 年～1477 年）の後、京極家の勢力は大きく衰退しましたが、17 代当主・京極高次（1563 年～1609 年）なんとか一族の繁栄を再興することができました。彼は若い頃に何度か忠誠を変え、当時の日本の事実上の指導者であった豊臣秀吉（1537 年～1598 年）の下での軍事作戦で頭角を現しました。高次はその功績を認められて大名となり、近江国（現在の滋賀県）の大津城の城主となりました。1587 年に、高次は、後に彼女の家系が京極家にとってかけがえのないものだったと証明された高貴な生まれの女性、お初（1570 年～1633 年）と結婚しました。

高次は、秀吉の死後に国の支配を目指した強力な大名であった徳川家康（1543 年～1616 年）の同盟者になりました。家康が日本の東部に軍を集めたとき、高次はどうか敵の一部を大津城で足止めし、1600 年の重大な関ヶ原の戦いで家康の勝利に貢献しました。同年、この功績により、高次は新たにつくられた小浜藩の最初の藩主に任命されました。

藩主として、高次は若狭地方の防御を改善するために、小さな後瀬山城に代わる小浜城の建設を開始しました。彼はまた、小浜の町自体の改変を監督し、にぎやかな港町での商人たちの商いの成長を支え、城の周りに侍たちの住居の地区を建設しました。

お初（^{じょうこういん}常高院）

お初は、大名の浅井長政（^{あざ いながまさ}1545 年～1573 年）と有力な武将だった織田信長（1534 年～1582 年）の妹であり長政の妻だったお市（1547 年～1583 年）の間に生まれた 3 人の娘の 1 人でした。お初は 1587 年に京極高次と結婚し、大津城の女主人となりました。彼女は子どもを産むことができませんでしたが、夫の信頼できる相談役として尽くした、美しく知的な妻と見なされています。

ました。彼女の姉は豊臣秀吉の寵愛を受け、妹は二代目将軍の徳川秀忠^{ひでただ}(1579 年～1632 年)の妻だったので、初の家系は高次との結婚に際して貴重な財産となりました。これによってお初は、日本の歴史上のその時代で最も有力な 2 つの家の間の仲介者として尽くしました。

1600 年、お初は、徳川家の敵から大津城を守る夫を助け、そして高次が小浜藩主の称号を与えられ、二人は若狭に移りました。1609 年に高次が亡くなった後、お初は当時の高貴な女性の慣例に従い、小浜の常高寺^{じょうこうじ}で尼となり、常高院と名乗りました。尼僧は俗世から引き下がるものとされていましたが、お初は家のつながりを利用して、何年にもわたって対立していた豊臣家と徳川家の間の和平の仲裁を行いました。1615 年にその争いが頂点に達したとき、お初は豊臣家が支配する大坂城にいて、まだ彼女の姉との交渉を続けていたので、城が徳川軍によって焼け落とされる前に、お初の家臣たちは彼女を避難させなければならませんでした。

お初は 1633 年に亡くなり、彼女の遺願によって常高寺に葬られました。

展示品

二つの掛け軸は、江戸時代（1603 年～1867 年）の宮廷装束の京極高次と、尼となった高貴な女性の典型的な服装をした妻のお初（常高院）の肖像画の複製です。そのほかの展示には、京極氏系図の複製や、お初の大坂城からの劇的な脱出を描いたページを開いた「お菊物語（菊の物語）」の挿絵の複写などがあります。